

精神分析から見たエゴイズムの起源

—パラノイア的人格構造と攻撃性—

田村公江

序

1) ラカンを倫理学の分野で研究する意義

無意識の欲望を根幹的主題とする精神分析は、倫理学との間に接点を持つことができるのだろうか。ラカンによって練り直された精神分析の学説は、我が国には、精神病理学の分野にいち早く支持者を獲得し（もっとも、ラカン派は少数派の一つを占めている、というのが現状のようであるが）、次いで文学者の関心を引きつけ、哲学、倫理学の分野への浸透が現在進行中という現状であるので、私たちは先ず接点を探す作業から始めなければならない。

しかし、考えてみれば、精神分析という学は、フロイトがそれを創始した時から既に、単なる治療理論にとどまらず、人間精神の営み全般に及ぶ学説であった。それは、一つの間人学を構築しているのである。ただ、比喩的に言うならば、精神分析は、人間とその行動を、いわば裏面から考察する。言い換えれば、哲学、倫理学にとって根本的であり自明である見方とは違う見方を選んでいるのである。この違いを、ラカンは『セミネール7巻』の13～14ページで、精神分析は、ニコマコス倫理学において「獣性」として倫理の領域から排除された領域を扱うのだ、と言っている。アリストテレスは、今で言えば神経症に相当する行動様式を獣性に含めている。健全でない精神の行いには倫理は関与しないのだという見解は、実にアリストテレスに遡る、ということになる。

精神分析は、「獣性」の領域を主領域として倫理を考察する。その基本的発想は、自己同一性や自律を備えた人格とは程遠いものとして主体を捉えるというものであり、その基本的戦略は、意味付けではなく差異性として取り扱われるシニフィアンに注目してシニフィアンの連鎖を追跡するというものである。

このように、発想も戦略も異なる精神分析から、倫理学は何を受け取ることができるだろうか。精神分析は、倫理学に何かを付け加えることはできないか

もしれないが、倫理学上の基本概念を別の見方から再検討することを可能にしてくれる。ラカンを研究する意義は、そこにあると思われる。

2) 再検討の可能性。幸福、快感、功利主義、最高善、規範、価値等々

そもそも、精神分析は、言葉による治療であるから、言葉への関心は精神分析の本領である。しかも、言葉への関心もまた言葉によって語られるという、言葉に捉えられている私たち人間の実情を、どこまでも念頭に置いて言葉使いを分析する。精神分析はこのような課題を遂行するために、知を受け取ったり伝えたりする際の次元の違いや知が及ばない際の不可能性を、見過ごさないように努めるのである。ラカンが導入したのは、想像界 (l'imaginaire)、象徴界 (le symbolique)、そして現実界 (le réel) という三つの範域であった¹⁾。私たちは、幸福、快感、正義、規範、価値といった概念や、義務論、功利主義といった学説等々を、三範域の区別に留意しつつ、再検討することができるだろうし、その作業を通じて問題の本質が見えてくることを期待できる。

3) 本論の課題

本論においては、「エゴイズム」という、古くて新しい、そして陳腐でもある概念に取り組んでみたい。この語が道徳の用語としての資格を持っているかどうかについては、疑問もあるだろう。この類の曖昧さを含んだまま使われる語は、便利さゆえに、あらためて吟味される機会が少なく、厳密な論述においてよりは、むしろ常識に依存する日常用語に属しているとも思われるからである。しかし、連想してみれば、この語はきわめて含蓄に富んでいる。「利己主義」と訳してみても分解すれば、「利益」、「自己」というどちらも倫理学において重要な概念が出て来る。エゴイズムとは、結局、自己利益追求、の意なのだろうか。しかし、利益という概念の周辺には、快、幸福、善、そして快樂主義、功利主義という一連の概念があり、また、自己という概念の周辺には、自己の区別、自己同一性という難問がある。

¹⁾ここで範域と訳したのは、registre。知をめぐる何事かが位置付けられる場所、原意で言えば登録簿、つまり登録される場所、というのが直訳。境域、領域、等の訳語があるが、ここでは、範域と訳しておく。それぞれの範域の特徴については、拙論「フェミニズムへの精神分析的視点」の注2、3、4を参照。

「エゴイズム」という語は、以上のような倫理学的問題連関を持ちつつ、日常語においては、ある行動者の行動、ないし行動方針に対して、他者への配慮が不足、ないし欠如しているという非難として、発言される。そしてエゴイズムへの処方箋は、合理的エゴイズムへの啓蒙（他人のために配慮することが、結局自分の利益にもなる、或いは、今自分の利益を断念すれば、長期的にはより確実に安定した利益を得ることができる、と説得する）か、他者への情動的共感の育成（自分と他人が合理的判断において交換可能である、という論理的操作による場合には、単なる感情移入による場合とで若干趣は違うが、自分も他人も合理的判断をする存在である、という想定には頼らざるを得ない）か、或いはそれらの組み合わせか、に落ち着きがちである。しかし、エゴイズムが、そもそもどの程度深く人間の本性に根ざしているのか、という心理学的問い掛けは、あまりなされていない。本論においては、そのような心理学的問い掛けをラカンのテキストを手掛かりに試み、エゴイズムの起源を辿ってみたい。

4) 見取り図と関連テキスト

以下に、私たちは、ラカンのテキストの読み取りに入っていくが、その前に、簡単な見取り図を示しておこう。先に、「エゴイズム」を「自己」と「利益」に分解したが、となると、私たちの考察も、「自己」について、そして「利益」についてなされなければならないだろう。精神分析において前者は、人格形成の発達論及び心的装置の局所論として展開され、後者は、快感原則及びリビドー論として展開される。もっとも、リビドー発達として人格形成が考えられているのであるから、両者は別個のものではないのであるが。

ラカンの思想においては、前者については、さしあたり自我（le moi）と斜線を引かれた主体（ $\$$ ）についての問題として読み取ることができ、後者については、欲望の対象（objet a と示される）が主体にどのように与えられるのか、という問題として読み取ることができる。たとえば『セミネール 7巻』（pp. 21-22）において、ラカンは、利益-快感について、快を象徴界においてあるものと考えたことがベンサム功績であったというベンサム再評価を表明している。本論においては、前者について考察し、後者については、ラカンから見た功利主義論として、いずれ稿を改めて論じることとする。

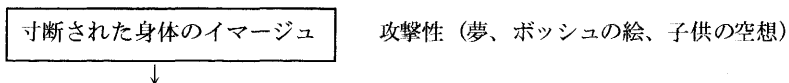
では、前者すなわちラカンによる人格論をどのように読み取っていくか。結論を先取りして言えば、ラカンは、人格をパラノイア的構造と同質であると主張し、そこには攻撃性が不可避的に伴うことを示している。このような見解はラカンのテキストのどこから読み取ることができるのか。比較的集中してこのテーマに言及しているのは、『エクリ』に収録されている「精神分析の経験において私たちに明らかにされた、[一人称]「私」の機能を形成するものとしての鏡像段階（Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanalytique）、1949」（以下この文献を「鏡像段階」と略称する）及び「精神分析における攻撃性（L'agressivité en psychanalyse）、1948」（以下この文献を「攻撃性」と略称する）である。また、『セミナー11巻、精神分析の四つの基本概念（Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse）、1964』231ページにおいても、鏡像段階への言及がある。そこで、主にこれらのテキストを手掛かりとすることにする。なお、引用、参照の際には、エクリ収録論文はE.、セミナーはSém.と略記号を付け、Seuil版ページ数を記すことにする。

1. 「鏡像段階」から読み取られる自我形成のプロセス

先ず最初に断っておかなければならないのは、「エゴイズム」の起源としての「自己」についての考察は、精神分析においては「自我 (le moi)」という概念のもとで進められる、ということである。私たちがここでラカンの「鏡像段階」において自我形成のプロセスを把握しようと試みるのは、この仮説においてラカンが自我の起源を説明しているからである。

1) 自我形成プロセスの図式

まず自我形成のプロセスを図式的にまとめて、テキストから鍵概念を抜き出して配置してみよう。



自己身体のイメージへの同一化



同類のイメージへの同一化

ゲシュタルトの形成的効果 (外在性)

鏡像段階

je の疎外、je の心的恒常性

自分自身との敵対性、分身

社会的弁証法

パラノイアの疎外、パラノイア的認識

他者との敵対性、原初的嫉妬のドラマ

鏡

フロイトの用語との対応を付けるとすれば、次のようになる。(左がラカンの右がフロイトの用語)

寸断された身体のイメージ・・・・・・・・ (部分欲動)

自己身体のイメージ・・・・・・・・ 理想自我 (le moi idéal; Idealich)
一次的ナルシズム

同類のイメージ・・・・・・・・ ? (兄弟関係)

(S1、一番目のシニフィアン)・・・・・・・・ 自我理想 (l'idéal du moi; Ichideal)
(E., p.231) 二次的同一化 (E., p.231)
(エディプスの同一化)

2) 自我形成プロセスの要約

この図式に沿って、ラカンの記述からプロセスの要約を試みてみよう。

・「寸断された身体のイメージ (image du corps morcele)」

これは、身体の去勢、ねじりとり、切断、解体、切り分け、穴あけ、焼却、破裂等々のイメージである (E., p.104)。私たちは寸断された身体のイメージに、どのような時に会おうのだろうか。先ず、精神分析の治療過程がある程度進むと、必ず夢に現れることが知られている (E., p.97)。また、ボツシュの絵画においても、このような寸断されたイメージを見ることができる。さ

らにまた、2～5才の幼い子供のお話や遊びを観察すれば、首をちぎったり腹部を裂いたりすることが自発的に現れる空想の主題であることがわかる（E., p.105）。

これらのイメージは攻撃性と関連があることが指摘されているが、攻撃性を能動からだけ理解してはならない。むしろ能動-受動が未分であることが特徴である。従って、寸断された身体イメージにおいて、攻撃することと迫害されることが交錯している。このように能動-受動が未分であることは、内界と外界が未分である（回路になっている）ことによる。乳児期の幻想を再構成するとすれば、体内の不快感が（外界からの）迫害として、怒りが（外界から自分のもとにやってくる）対象を壊してしまう攻撃として、感じられているのであろう。言うまでもなくこれは、M. クラインの妄想-分裂態勢に相当する。ラカンは、クラインが妄想-分裂態勢に位置付けた幻想を、寸断された身体イメージと呼ぶのである。

ラカンはまた、この仮説的時期を、人間が未熟な状態で生まれてくることに関連させている（E., pp.96-97）。新生児期の運動調節能力の不足と母親への依存という生物学的条件が、人間の「自然」への関係を動物の場合とは違ったものにしていて、と言う。恐らく、動物の場合には、「自然」が、イメージを介することなくダイレクトに知覚されているのであろう。

・自己身体のイメージへの同一化

この段階が鏡像段階と呼ばれる。それは、6か月～18か月の子供が、鏡の中に自分の姿を認知し、歩行や直立さえ覚束なく、誰かに抱かれているか歩行器に支えられているのに、その支えから身を乗り出し、大喜びで、鏡に映る像を動かしたり固定させたりするという遊戯に夢中になる（E., p.93）、と描写されている。

しかし、鏡に映っているのが自分である、という自己像認知が成立していることが問題なのではない。ケーラー（Wolfgang Köhler: 類人猿の知能検査をして、類人猿にも洞察があり、そこにゲシュタルトが成立し機能していることを立証した）によれば、類人猿も同じく自己像認知をするからである。問題なのは自己像認知の後であって、類人猿が、鏡像が実像でないことを確認すると興味を失ってしまうのに対して、人間の子供は（その時点の道具的知能において

猿に遅れを取っているにもかかわらず)、体の動きと鏡像の動きの同調を確認する遊びに大喜び (jubilation) でうち興じるのである。

このように鏡像段階においては、遊戯を通じて、自己身体像が周りの世界から独立であることが獲得される。子供は、全体としてまとまりのある自己身体像に同一化する (この同一化は、寸断された身体のエマージュの時期に伴う居心地の悪さから逃れるかのように、「飛び込む (se précipiter)」と言われる) ことによって、周りの世界から独立したまとまりのある自我を成立させる。寸断された身体のエマージュの部分性は、整形外科的につなぎあわせられ、同時に、内界と外界の回路は切断される。

身体像がこのような形成的効果を持つことは、身体像をゲシュタルトと考えるとさらに理解しやすい。ラカン、雌ハトの性的成熟のためには同種の姿を (鏡像でもよいから) 見るが必要であること、イナゴの独居性から群居性への変化には同種個体の運動の特徴を備えた運動を見るが必要であること、などを挙げる。しかし、ラカンの強調は、種に固有な形態の作用ではなく、それが形であること、すなわち空間的形態であることに置かれる。結局ラカンがゲシュタルトを持ち出す意図は、有機体にとっての空間的形態の重要性、すなわちエマージュの外在性の重要性を示すことにある。

このような外在性の強調によって、エマージュが、決して内的本質ではないことも明白に示される。自己身体エマージュへと同一化することによって、いわば原初的自我が成立し、それ以前の恐怖に満ちた寸断された身体エマージュの時期を脱することができ、全体的まとまり、恒常性、内界と外界の区別を獲得することができるのだが、それと同時に、有機体の現実には疎外されることになる。有機体の現実と同一化の像との照合は、構造からして終わることがない。従って、自我は構造的に $a-a'$ という相互性の関係にある。鏡像に惚れ込んで死んでしまうナルキッソスの神話も、小説の主題となる分身もの (ポーの『ウィリアム・ウィルソン』など) も、この同一化と疎外のドラマとして理解できる。

・同類のエマージュへの同一化

ラカンは、鏡像段階において原初的自我が成立した後、同類のエマージュへの同一化によって、他者との関係、対象との関係が形成され、人間世界の構造

が作られていく段階が始まると考えている (E., pp.97-98)。そのもっとも原形的な例は、シャルロット・ビューラー (Charlotte Buhler) の学派が報告している転嫁現象 (transstivisme) である。ぶった子供がぶたれたと言う、転んだ子供を見ている子供が泣き出すというこの現象は、感情移入によるのではなく、同類のイマージュへの同一化による、とラカンは考える。(ただし、転嫁現象が起こるのは、子供たちの月齢差が6か月から2歳半まで、とラカンは注意している。E., p.113) この現象においては、鏡像段階において遊戯的に確認された (鏡像と身体) 同調関係が、子供たち相互の間で生じていると考えられる。そして、鏡像段階で見たように、同一化には疎外が伴うという両価的構造であるから、一見相反する立場の二人に同一化が生じることもある。ラカンはその例として、奴隷と暴君、俳優と観客、誘惑者と誘惑される者を挙げている (E., p.113)。

また、他者との鏡像的同調関係によって、他者の求める対象は私の欲望をかきたてることにもなる (E., p.98, p.427)。ここで問題となるのは、他者との同一化が鏡像的である、つまり空間的形象として他者も私も獲得され、対象もまた空間的形象として差し出される、ということである (E., p.111, p.427)。心的発達はこうして進んでいくが、空間的形象つまりイマージュへの固定によって、自我は自分が何者かについての知を確保していくので、鎧を纏うようでもある。

・フロイトの用語との対応

疑問点は、同類のイマージュへの同一化が、フロイトにおいて何に当たるかである。『エクリ』231ページには、一の線 (trait unaire; ein einziger Zug、一番目のシニフィアン S 1) はナルシシクな一次的同一化の場にはなく、自我理想、フロイトが二番目の同一化としたものの場にある、とある。これを読むと、同類のイマージュへの同一化を自我理想と対応させるわけにはいかない。

ところが、E., p.117 には、自我理想と父のイマージョ (l'imagο du père) が関連付けられている。父が小文字であり、父のイマージョなのであるから、自我理想はイマージュの系譜に位置付けられるようにも読める。となると、同類のイマージュと自我理想とを対応させてもよいのだろうか。

しかし、やはり E., p.117 の続きを読むと、同類のイマージュの系譜の中に位置付けられるのは、フロイトが『トーテムとタブー』で解明した父殺し神話に

おける兄弟関係であろう、と思われる。自我理想は平和をもたらす機能を持つからである。死んだ父をトーテムとし、父の女を禁止しあうことによって兄弟たちは争いを避ける。このような展開は、想像的關係と象徴的關係の転換及び接点にあたる。ラカンは同類のイメージへの同一化について、それが社会的弁証法への踏み出しになるとは言いながら詳しく語らない。転嫁現象は余りにも単純な例である。しかし、多少なりとも言語活動が入ってくると、想像的關係だけではすまなくなるのであろう。単純な例以外ではシニフィアンの働きも介在している。例えば、「私は人間です」という言明には「人間」という語がシニフィアンとして機能している。ラカンによれば、これは「私は、その者を人間と認知しつつ、自分をそのような者であると認知する、そのように私はその者を確立しているのだが、私はその者に似ている」(E., p.118)ということをおうとしている。ある人物をシニフィアンによって認知していることと、その人物のイメージに似ていることが両方関わっている。

私たちが日々体験している対象認識や自己反省には、想像的機能と象徴的機能の両方が重なっているのである。よほど特殊な極端な例でなければ、どちらかが特に顕著であることはない。言語活動を私たちは日々しているわけだが、言語活動イコール象徴的機能というほど単純ではない。イメージは視覚的形象、反射という照合関係というのが原義であるが、イメージへの捕われは意味付けへの捕われに通じるからである。そして、シニフィアンが連鎖するところに文脈が生まれ、私たちは絶えず意味付けを求めがちであるからである。また一方、純粹にシニフィアンの構造だけを把握するということは、ほとんど不可能なのであって、ラカンが作った記号や図表を見つめるしかない(その際にも記号や図表の視覚的イメージに頼っている)。分析家としてのラカンには、象徴的機能が想像的機能に覆われていて余りにも無視されている、という印象が強かったと思われる。そのため両者を峻別することに意を注いだのであろう。しかし、ここで注意すべきなのは、だからといって、想像的機能から象徴的機能に切り換えられるわけではないということである。

2. ラカンの自我論の要点 (誤認とイメージへの捕われ)

1) 自我という概念の多義性

前章で、精神分析においては「自己」は「自我」という概念のもとに考察される、と言ったが、フロイトにおいて既に、自我という概念自体が非常に幅広いので、どのように読み取るかが問題となる。例えば、フロイトの後期局所論（エス-自我-超自我）における自我の役割について、自我は、快感原則に支配されているエスの圧力、残酷なほどの厳しい要求を突きつける超自我、適応しなければならない現実世界、これら三人の主人に仕えているというフロイト自身による説明がよく知られている（フロイト『自我とエス』, G. W. XIII., p.286-を参照）。従って、フロイトの自我概念を、知覚-意識系として、人格統合機能と現実への適応を担うものと理解することもできる。そしてそのような理解に基づいて、結局のところ現実に適応できるように、自我を強化したり調和へと導くこと、要するに成熟させることを、治療であると考え人々もいる。しかし、ラカンはそのようには考えない。ラカンの自我論は、フロイトを別の読み方で読み取ったものである。

2) 誤認

ではラカンの自我論は、何をもって自我の本質的特徴と考えるのか。フロイトは論文「否定」において、「私は（そのようなことは）考えたこともない」という否定によって分析家は患者の無意識が何を語っているのかを知る、といったことを述べている（E., p.109）。ラカンはこれをとらえて、認識（connaissance）ではなく認識欠如（méconnaissance）こそが自我の特徴であると考え（E., p.99）²⁾。自我は、ある部分を（結局、無意識の主体ということだが）認識し損なう、そして、そこは違う部分を自分だと思込んでいる。自分についての認識が、ある部分には及ばないこと、別の部分を自分だと思込込むこと、これが、méconnaissance である。従って、訳す時には、文脈によって、認識欠如と訳したり、誤認と訳したりする³⁾。

²⁾ この箇所ではラカンは、サルトルの限界を指摘しつつ、精神分析による自我理解を述べている。「私たちのあらゆる経験は、「知覚-意識系」に中心化されたものとして、また「現実原則」によって組織されたものとして「自我」を把握することから私たちを逸らせ、自我をあらゆる構造において特徴付けている「誤認の機能」から始めるように指示するのです。」

³⁾ 他の訳語を選択することももちろん可能であり、たとえば、無視という訳語が使われることもあるが、その場合、構造的に認識の及ばないところがあるゆえに、無視していることになってしまう、の意味であって、知っていて無視するという意味ではない。このように、構造上の特徴を訳語に反映させているかが問題となる。

3) イマージュへの捕われ

誤認においては、何か別のものを自分だと見誤っているわけだが、この見誤ってつかんでしまうことを逆に言えば、ある視覚像に捕われるということになる。これがイマージュへの同一化と言われるものである。ラカンが自我のもう一つの特徴を、イマージュへの捕われ (captation, fixation) と考えている。ところで、自我とイマージュを関連付ける見方は、フロイトにもある。『自我とエス』(G.W., p.253)においてフロイトは、「自我は何よりもまず身体自我表面の投射」と言っている。また、自我と理想「像」との関係を、自我理想という語によって説明している。ラカンは、自我の形成や構造においてイマージュが果たしている役割を、一貫して重要視している。イマージュとは、思い描かれたり空想されたりする漠然とした思想内容のことではなく、何よりも先ず、視覚的空間的な形象、映像が原義である。従って、虚像-実像という相互性、反射し合うという向かい合った二者関係が、イマージュという概念には当初から含まれている。イマージュは、主体がそれへと同一化する姿(手本、理想と言い換えることもできるもの)として機能することがあり、その文脈においてはイマージゴと言われる。そして鏡象段階は、イマージュへの同一化の起原型として想定された、自我形成の仮説的段階なのである。

要約すると、認識欠如ないし誤認 (méconnaissance) とイマージュへの捕われ、この二つがラカンの自我論の主要な着想である。ラカンは、自我の構造的特徴をこのようにとらえているのである。

3. ラカンの理論体系における「鏡像段階」の位置付け

「鏡像段階」という論文は、自我形成の仮説的原初段階を描写し、自我を構成する原初的イマージュについて考察することを、主題としている。そして、イマージュという空間的視覚的形象の意義が、ゲシュタルトという心理学における近接的概念との比較検討やフロイトに由来する概念(理想自我、自我理想)との関連付けを通じて、いわば彫り出されていき、私たちは読み進むにつれて、想像界の特徴を読み取ることができる。しかし(これはラカンのどのテキストにも言えることだが)、ラカン理論のある部分を主題的に扱いつつ、同時にさながらシニフィアン連鎖のように、その部分は他の部分につながっているので、

これが読みにくさの原因になっている。「鏡像段階」に関して言えば、主として想像界を扱っているとはいえ、底流には、リビドーというフロイトが生物的エネルギーとの関連を捨てきれなかった心理的概念を、どう解釈していくか、という問題が横たわっている。知覚、記憶、情念、これらの現象をリビドーの動きかた（疎通という仮説、自由エネルギー、拘束エネルギーの区別）によって説明しようという意図をフロイトは結局十分に果たさなかった（『科学的心理学草稿』）。ラカンのテキストに馴染んでくると、この問題が、主体は現実界に直接に端的に出会うのではなく、主体が出会う対象は代わりでしかないという考え、現実界との接点として部分欲動を出発点とするという考えのもとに、現実界—想像界、現実界—象徴界の関係において構想されていることが察知される。たとえば、部分欲動→寸断された身体 of イマージュ→統一身体像、と迎えば想像界の機能が、部分欲動→部分対象→失われた対象→欲望と主体→一番目のシニフィアン（ein einziger Zug, S1）と、迎れば象徴界の機能が語られる（cf. Sém. XI, p.231）。「鏡像段階」という論文においては、この前者が扱われているのである。主体は現実界に直接出会うのではなく、イマージュという代わりを介して出会う。イマージュを介して自我が構成され、対象もまた形作られる、ということが主題的に述べられる。そして、自我の構造に由来する攻撃性についても言及されるが、この主題は「攻撃性」においてより集中して扱われる。「鏡像段階」においては、イマージュへの捕われを断ち切る処方箋についても、象徴界に関連があることが「想像的拘束の結び目を、愛は絶えず解体し切断し続けなければなりません」（E., p.100）と示唆されるのみである。

4. 誤認及びイマージュへの捕われから不可避免的に生ずる自我の諸特徴

1) 「鏡像段階」からの読み取り

これまでのところから私たちは、自我には誤認とイマージュへの捕われが、構造的に認められること、イマージュが、有機体にとって宿命的な空間の意味を及ぼすゲシュタルトとして与えられること、そしてイマージュが有機体そのものではなくその代わり、フィクションであること、にもかかわらず自我はそれを自らの恒常的実体の拠り所とすること、を確認した。

ラカンは「鏡像段階」において、自己身体のイメージへの同一化が完了すると、同類 (le semblable) のイメージへの同一化によって社会的弁証法が始まる、そして社会的弁証法が人間の認識をパラノイア的にすると述べている (E., p.96)。もっともラカンの「鏡像段階」における力点は、鏡像段階において既に顕著に示されているイメージへの捕われが、同類のイメージへの同一化においても引き継がれ、そこに je に固有な慣性が作られること (E., p.99) である。「鏡像段階」の終わりの部分では、イメージへの捕われを想像的拘束と言い換え、想像的拘束のもとにある限り、そこに潜む攻撃性を見抜くことはできないことが指摘されている (E., pp.99-100)。従って、「鏡像段階」から読み取る限りでは、パラノイア的認識とは、イメージへの捕われによる世界についての知 (想像的に構成される自我、他者、対象) を指すと同時に、想像的拘束のもとにあるため攻撃性を秘めていることに気付かないことをも指す、と結論される。

2) 「攻撃性」からの読み取り

では、「攻撃性」においては、この問題はどのように掘り下げられているのか。ラカンの論述に沿って、攻撃性への言及を辿ってみよう。

- ・攻撃性という概念の中心には、フロイト以来の難問である死の本能という問題がある。

- ・分析場面において、また分析家の目には明らかな諸現象において、様々なファンタズム (幻想) に攻撃性が現れている。それらは、寸断された身体のイメージである。攻撃性は、イメージとの関連において、すなわち想像的機能との関連において考察される (E., p.105)。非常に原則的に言えば、イマージョは、同一化を形成するものと理解される。

- ・治療において、分析家の役目を述べて、分析が通常の対話ではないことを示す、という文脈において、ラカンは、分析家が純粋な鏡として、一切の個人的好みを出さないで接する時、患者のナルシシックな構造における重要なイマージョが、分析家の上に影されること、そして分析家の上のイマージョに対して攻撃性が表面化すること、を指摘する (E., pp.106-109)。

- ・パラノイア性精神病には攻撃性が顕著に現れ、様々な魔術的妄想的迫害や疑

心暗鬼の邪推などが挙げられるが、これらは、ありふれた人間関係にも見出すことができることも指摘される (E., pp.110-111)。そしてその構造的な原因が、映画フィルムが止まってしまったかのような形の停滞 (stagnation formelle) 言い換えれば形の固定 (fixation formelle) であること、そしてこれが、人間の認識を形成する上でどうしても関わってくるということが述べられる (E., p.111)。

・メラニー・クラインに言及しつつ (ラカンはクラインの発達理論から非常に示唆を受けている。とりわけ、部分対象、よい対象、悪い対象について)、鏡像段階で統一身体イメージのもとに原初的自我が形成されたにもかかわらず、そしてその後の同類のイメージへの同一化がやはり想像的機能によってもたらされているにもかかわらず、なぜ、内的な悪い対象が統合されずに分離して現れてくるのかを考える。しかし、この疑問は、いわば答を含んでいる。私たちは、イメージを介しての同一化が同時に疎外を伴い、生きられた現実をイメージのもとにすべて統合するわけではないことを、知っている。従って、寸断された身体イメージは、自我の同一性に実はつきまとっているのである。

・こうして、ラカンは、攻撃性の構造的起源が、イメージへの固定にある、すなわちそもそも空間というカテゴリーに対応している、と言う (E., p.120)。(ちなみに時間のカテゴリーには不安に対応すると言う。)

3) 自我のパラノイアの構造と攻撃性

以上を総合して、私たちは、自我のパラノイアの構造と攻撃性についてまとめてみよう。パラノイア的とは、イメージに捕われ、形の固定によって同一性を形成しながらも、疎外された現実が寸断されたイメージという形をとって常につきまとっているため、それを外部に投影して内的同一性をますます固定的に守る、という一種の閉鎖回路として理解されるだろう。すなわち、パラノイア的認識とは私たちが経験している世界を構成している想像的機能と、基本的には同質である。

そして、攻撃性は、仮説的段階である寸断された身体イメージの時期においては、自他未分、能動-受動交錯として経験される苦痛体験 (クラインでいえば悪い対象) に由来し、想像的機能によって自我が同一性を持つ、つまり

一義的となった後は、外部との攻撃的緊張として経験される。外部との攻撃的緊張が妄想的迫害として経験されるにせよ、対人関係における敵対性として現れるにせよ、或いはまた利他的行為に潜む敵意であるにせよ、それらがパラノイア的構造から生じた攻撃性である点においては同じである。

結論

1) エゴイズムの起源

エゴイズムという語は以上のようなラカンの考察を踏まえて言い直すならば、パラノイア的自我構造とそこから生じる攻撃性のことである。そしてこのように自我を捉えると、自己同一性や理性や自律を備えた人間らしさの核、言い換えれば人格にまとまりを与える恒常性の根源と考えられているものも、他人を押し退けて「自分勝手」や「我儘」をする「自分」というものも、どちらも「自我」の構造から理解される。

また、エゴイストと呼ばれる人への、利益を独り占めする、他者への配慮をしない、という非難において問題なのは、利益（精神分析においては対象という語を使って論じられる）の分配ではなく、他者排斥であると思われる。そして自我がイマージュを介する同一性に固執する限り攻撃性は内部と外部の排斥関係として経験されるので、他者排斥を避けることはできず、利他的行為に攻撃性が潜むことにも、構造上気付かれない（誤認）。

2) 攻撃性への処方箋。

戦略的に考えると、このような構造になっているのだから、「同じ人間ではないか」という説得は、想像的同一性を喚起するものである限り、実は効果的ではない。相互同一視は相互疎外でもあるからである。また、想像的同一化のイマージュを整備して、たとえば「攻撃性を抑制することのできる成熟した人柄」というイマージュへと教化する方法にも限界がある。攻撃性の起源は、寸断された身体のイマージュとして現れる部分欲動に由来するからである。しかも、「啓蒙」や「教化」をする人自身の欲望に、他者を支配したいという攻撃性が含まれるかもしれない、ということに知が及ばない仕組みになってしまう。

むしろ、人と人との関係において、だれもが自我を手放すことはできず、他

者排斥をせざるを得ない、という構造を認めた方がよいのではないか。私たちが合理的判断の拠り所とする個人というものが誤認という構造によって成立していることを、受け入れた方がよいのではないか。誰か一人だけが（委任された専門家たちの合意であっても）このような構造を免れている、と考えることは、むしろ危険である。自我の構造を受け入れた上で、イマージュへの捕われを断ち切る可能性を考えてみよう。これは、言い換えれば、想像的同一化のイマージュによらないで、寸断された身体のイマージュとして現れる部分欲動の非統合性、そしてとりわけその両価性を鎮めるにはどうすればよいか、という問題である。この問題に関しては、「鏡像段階」の最後に示唆されるように、象徴的機能が糸口となる。また「攻撃性」においては、分析家が鏡の役割をして患者がそこにイマージュを見出すように仕向け、患者の自我ではなく、象徴界においてシニフィアン連鎖に現れる主体（斜線を引かれた主体\$）を出現させる、ということが述べられている。

しかし、私たちは、象徴界か想像界か、という二者択一の前に立っているわけではない。そもそも、どちらかを選べるものでもない。むしろ、より実情に即して言えば、想像界と象徴界に、同時に生きている。従って、問題は、想像界にとらわれ過ぎて象徴界を無視しがちだが、そうならないように、ということである。

では、無視されがちな象徴界を、見落とさないためにはどうするのか。

ここに来て、私たちは倫理的実践としての精神分析の課題と出会うことになる。答は、欲望を問うこと（「お前は何を欲しているのか」）である。

「私は何者なのか」という自我の自己点検作業ではなく、「私は何を欲するのか」という欲望の主体の絶えざる問い掛けこそが、パラノイア的認識の堅固な鎧から私たちを解放してくれるのであろう。

（たむら きみえ）